

# 研究

## 万葉集・古今和歌集・新古今和歌集における「浪」考

— 万葉集を中心として —

熊本女子大学国文学科第二十二回

中山眞理子

### 目次

序

本論

一、浪の詠歌数と種類

二、万葉集の「浪」についての考察

三、熟語の浪についての考察

1、万葉集における熟語の浪

2、古今集、新古今集における熟語の浪

結論

参考文献

序

遠く万葉の時代から歌には多くの自然が詠み込まれている。しか

し、多少の変化はあっても大きく変わるはずのない自然も、その捕え方においては、時代により異なりを見せている。そして万葉集ほど自然が自由に捕えられた歌集はないと思われる。

そこで、本論では、自然の中からいつの時代も全く変わることなく、さまざまな性質を有する浪を取り上げて検討したいと思う。

浪は非常に表情豊かな自然と言えよう。たとえば、動きを見ても、「しぎりに寄せる浪」や「穏やかに寄せる浪」、また「高く立つ浪」というようにさまざまである。場所的に見ても海だけでなく、川や池や湖にも浪は立つのである。このような浪は、見る人のおかれた境遇やその時の気持ちによっていろいろな捕えられるものと思う。

ところで、万葉人は、どのような浪に興味を持ち、それをいかに捕え、表現したのであろうか。また、古今和歌集、新古今和歌集（以下、古今集、新古今集とする。）に至るとそれはどのような変遷を示すのであろうか。そこで、浪に対する関心度、好悪感、歌中に

おける浪の役割などを統計的資料を基に万葉集を中心に考察してみたい。

なお、考察にあたっては、万葉集では「萬葉集・本文篇」（埴書房）を、また、古今集新古今集では「日本古典文学大系」をテキストとした。

本 論

一、浪の詠歌数と種類

まず浪の詠歌数から見ると、万葉集、古今集、新古今集において浪は四一二首に詠み込まれている。これを歌集別に見ると一表のようになる。（なお、割合は小数第三位を四捨五入した数であり、以下これに従う。）

一表

①に対する②の割合	浪の詠歌数 ②	総歌数 ①	万葉集	古今集	新古今集
			計		
5.71%	258	4516			
3.96%	44	1111			
5.56%	110	1979			
5.42%	412	7606			

表から浪は万葉集に最も多く、以下、新古今集、古今集の順位であることがわかる。ところで、三歌集から浪を拾い出すと全部で四四六例あり、一表の詠歌数と異なるが、これは一首中に浪が重複し

て詠み込まれているものがあるためである。四四六例の浪は六十五種類に分類されるが、これ等は次の四種類にまとめられる。

- ① 浪自体を称したもの
  - ② 浪と関係深い浪が、浪自体を示していないもの
  - ③ 浪と直接は関係のないもの
  - ④ 枕詞として用いられたもの
- これに従い浪の種類をあげると、二表から六表のようになる。なお、①ではさらに、浪の捕え方から「動的浪」、「色彩的浪」、「時間的浪」、「場所的浪」に区分した。またある特定の場所だけに立つ「地名+浪」も①に加えた。

二表

さざれ波	ささなみ	五百重浪	浪荒浪	あだ浪	種類	
					総数	比率
6	1	3	1			万葉集
2.54	0.42%	1.27%	0.42%			比率
				1		古今集
				2.63%		比率
						新古今集
						比率
6	1	3	1	1		計
1.65%	0.28%	0.83%	0.28%	0.28%		比率

場所的浪			時間的浪		色彩的浪			動的浪				
浦浪	岩浪	池浪	夕浪	夕だつ浪	白浪	沖つ白浪	青浪	八重浪	百重波	とゐ浪	千重浪	しき浪
2		2	1		44	14	2	1	1	3	3	2
0.85%		0.85%	0.42%		18.64%	5.93%	0.85%	0.42%	0.42%	1.27%	1.27%	0.85%
	1				6	3						
	2.63%				15.79%	7.89%						
	1			1	18	2						
	1.12%			1.12%	20.22%	2.25%						
2	2	2	1	1	68	19	2	1	1	3	3	2
0.55%	0.55%	0.55%	0.28%	0.28%	18.73%	5.23%	0.55%	0.28%	0.28%	0.83%	0.83%	0.55%

計	その他			場所的浪							
	浪枕	浪の花	浪	邊つ浪	邊浪	濱浪	門浪	白濱浪	河浪	沖つ波	沖浪
236			112	2	5	1	1	2	7	19	1
100%			47.46%	0.85%	2.12%	0.42%	0.42%	0.85%	2.97%	8.05%	0.42%
38		1	26								
100%		2.63%	68.42%								
89	1	1	62						3		
100%	1.12%	1.12%	69.66%						3.37%		
363	1	2	200	2	5	1	1	2	10	19	1
100%	0.28%	0.55%	55.10%	0.55%	1.38%	0.28%	0.28%	0.55%	2.75%	5.23%	0.28%



五表

③ 浪と直接は関係のないもの

計	みわかのうらな	夕浪千鳥	ほなみ	藤浪	浪かけ衣	ささなみ	雲の波	雲ぢの浪	おのが浪	老なみ	種類	
											総数	比率
35		1		18		14	1			1	2	万葉集
100%		2.86%		51.43%		40.00%	2.86%			2.86%	2	
3				3							3	古今集
100%				100%							3	
9	1		1	4	1			1	1		9	新古今集
100%	11.11%		11.11%	44.44%	11.11%			11.11%	11.11%		9	
47	1	1	1	25	1	14	1	1	1	1	47	計
100%	2.13%	2.13%	2.13%	53.19%	2.13%	29.79%	2.13%	2.13%	2.13%	2.13%	47	

六表

④ 枕詞として用いられたもの

計	藤浪の	波の穂の	浪雲の	立つ浪の	白波の	さざれ浪	(や)	さぶなみ(の)	沖つ浪	荒磯浪	種類	
											総数	比率
10	1	1	1	1	2	1			2	1	2	万葉集
100%	10.00%	10.00%	10.00%	10.00%	20.00%	10.00%			20.00%	10.00%	2	
2									2		2	古今集
100%									100%		2	
3							2	1			3	新古今集
100%							66.67%	33.33%			3	
15	1	1	1	1	2	1	2	1	4	1	15	計
100%	6.67%	6.67%	6.67%	6.67%	13.33%	6.67%	13.33%	6.67%	26.67%	6.67%	15	

ここでは①の「浪自体を称したもの」を中心に検討したい。まず「動的浪」から見ると、ほとんど万葉集に集中していることがわかる。そして万葉集では、浪のさまざまな動きが微細に捕えられ、非常に確かな名称で呼ばれているのがわかるのである。これから万葉人は浪に接する機会が多かったのではないか、また、動的なものに対する関心度が高かったのではないかと考えられる。前者については他の二歌集が京都の貴族を中心に詠まれたのに対し、万葉集は広い地域、階層の人びとの歌がおさめられているため、浪を見ることも多かったといえよう。また万葉人が非常に旅をしていたという事実もここでは大きく関係していると考えられる。

次に「色彩的浪」を見るとほとんど白い浪であるが、その中に二例「青浪」という名称がある。それは、ともに七夕の歌に詠み込まれており、天の川の夜の浪を指している。中国から伝来した七夕の歌にだけ「青浪」があるのは、漢文学的発想からくるものとも考えられる。また当時は陰影を帯びた白を青と表現していたという説<sup>注1</sup>もある。だが七夕の歌は想像された世界を詠んだものであるため、多分に技巧的表現になっているように思う。よって「青浪」は漢文学的発想と考えたい。<sup>(注2)</sup>

次に「時間的浪」について見ると万葉集に「夕浪」が、新古今集に「夕立つ浪」が一例ずつあり、共に夕方の浪である。わずかに二例から論じることが危険であるが、五表には「夕浪千鳥」という熟語もあり、時間的には夕方に立つ浪に興味をもっていたのではなからうか。

最後に「場所的浪」を見ると万葉集に圧倒的に多い。では他の歌集ではどのように表現されているのであろうか。古今集では「ぎし

による浪」、「入えの白浪」等があり、新古今集では「みなとのなみ」の如く助詞を加えて場所を示しているものがある。

## 二、万葉集の「浪」についての考察

二表で示したように、単なる「浪」は三歌集を通して二〇〇例あり、他の種類の浪と比べてみると圧倒的に多い。その中でも万葉集の「浪」が最も多いのである。そこで、これ等を万葉集の代表的部立である雑歌、相聞歌、挽歌に分類すると七表の如くなる。なお部立分類にあたっては「萬葉集講座・第六卷」<sup>(注3)</sup>を参考にした。

### 七表

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	部立	
												浪の 詠歌数	浪
			5	2	25	4			6		1	雑	歌
			5	2	25	4			6		1	相聞	歌
5	14	1	1	2	5			4			2	挽	歌
5	14	1	1	2	5			4			4	その他	浪
				1							2	計	浪
				1							2		
5	14	6	4	2	30	4	0	4	6	4	1		
5	14	6	4	2	30	4	0	4	6	6	1		

計	20	19	18	17	16	15	14	13
45								2
46								3
34								
36								
6								3
6								3
24	4	2	2	4	1	6	5	
24	4	2	2	4	1	6	5	
109	4	2	2	4	1	6	5	5
112	4	2	2	4	1	6	5	6

七表より「浪」は雑歌に最も多く、以下相聞歌、挽歌の順位であることがわかる。ところで、これ等の「浪」が各部立中に占める割合は八表の通りである。

八表

①に対する②の割合	「浪」の詠歌数②	総歌数①	雑歌	相聞歌	挽歌	その他	計
3.14%	45	1432					
2.00%	34	1697					
2.75%	6	218					
2.05%	24	1169					
2.41%	109	4516					

次に「浪」について内容的に考察していきたい。「浪」はどのように入らされて詠み込まれたのであろうか。これを七表に従って調べると九表のように部立別に大きな違いがあることがわかる。

九表

計	部立								計
	その他	濡らす浪	好まれる浪	実景の浪	強調的役割の浪	嫌われる浪	警諭的役割の浪	協役的な浪	
46	2	1	2	6	5	17	6	7	雑歌
100%	4.35%	2.17%	4.35%	13.04%	10.87%	36.96%	13.04%	15.22%	浪比率
36		1			1	1	22	11	相聞歌
100%		2.78%			2.78%	2.78%	61.11%	30.56%	浪比率
6								6	挽歌
100%								100%	浪比率
24	3	2	2			5	3	9	その他
100%	12.50%	8.33%	8.33%			20.83%	12.50%	37.50%	浪比率
112	5	4	4	6	6	23	31	33	浪
100%	4.46%	3.57%	3.57%	5.36%	5.36%	20.54%	27.68%	29.46%	浪比率

全巻を通して見ると「協役的な浪」が最も多く、以下「警諭的役割の浪」、「嫌われる浪」が多い。ところが部立別に見ると雑歌では「嫌われる浪」が、また相聞歌では「警諭的役割の浪」が圧倒的に多く、挽歌では、すべて「協役的な浪」である。

雑歌の「嫌われる浪」の用例をあげると、

長田王被<sup>レ</sup>遣<sup>二</sup>筑紫一渡<sup>二</sup>水嶋<sup>一</sup>之時歌二首

卷三 246 あしきたの のさかのうらゆ 野坂乃浦<sup>レ</sup>従<sup>レ</sup> 船出<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup> 水嶋<sup>レ</sup>尔<sup>レ</sup>将<sup>レ</sup>去<sup>レ</sup> 浪立<sup>レ</sup>莫<sup>レ</sup>動<sup>レ</sup>

の場合、「船出をしようと思うが、決して浪が立たないで欲しい」と言っており、浪が船旅を妨害するため、浪に対する恐怖心から嫌っているのである。そして他の十六首中十四首が同様に船旅において詠まれたものである。これより旅での浪は恐れられ嫌われていたことが想像されるのである。これは現在からは想像もできない程、未発達な船で旅をしなければならなかったからであろう。ところで石井庄司氏は雑歌の内容を「行幸・羈旅・遊獵が最も多く四季雑歌を省いた残り八百餘首の中、行幸は約百首羈旅は約三百首に近い数である」。(注5)と述べておられるが、このように雑歌においては旅の歌の占める割合が大きい「嫌われる浪」が多いといえよう。

相聞歌においては「譬喩的役割の浪」が圧倒的に多いが、まず相聞歌の有する特色から考えてみたい。相聞歌はそのほとんどが恋愛歌であることに注意したい。すなわち切ない恋慕の情を一首に托したものである。そのような部立中に「譬喩的役割の浪」が多いのは、自分の感情を直接表現するよりも、ある事物を譬喩的に捕えて表現する方が効果的だからであろう。また直接表現は露骨になるため避けられたもの思う。(注5)では浪のどのような性格を捕えて詠まれているのであろうか。そこで、捕え方別に分類すると①寄せる浪、②やむ時がない浪、③幾重にも寄せる浪、④浪音が高い浪、⑤しきりに寄せる浪、⑥外へ行く浪、⑦ゆったり寄せる浪、⑧行方がわからない浪、⑨不思議な浪⑩とどろくように寄せる浪となる。こ

れからわかるように実にさまざまな浪の性格が捕えられ詠まれているのである。ここでは①の用例中、一首のみあげてみたい。

卷十一 2729 あられふり とほつおほらに よするなみ 霰零 遠津大浦<sup>レ</sup>尔<sup>レ</sup> 縁<sup>レ</sup> 浪<sup>レ</sup> 縦毛<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>十方<sup>レ</sup> 憎<sup>レ</sup> 不有<sup>レ</sup>君

この場合、「寄せる浪のように二人の仲をいい寄せようとも」といい、「二人の仲をいい寄せる」ということを表現するために浪が用いられているのである。

最後に挽歌について述べると、六首中、五首が長歌であり、ひどく立つ浪の動きや音をすべて脇役に詠み込んである。長歌のもつ重おもしろい雲囲気とひどく立つ浪は、もうそれだけで暗く深い苦みの世界を創り出している。なお六首とも海や浜に対し脇役に用いられているが、人の命をも奪う浪に対する恐怖感や憎しみが滲み出ているように感じられるのである。

### 三、熟語の浪についての考察

本章では浪自体を称している熟語の浪について検討する。

#### 1、万葉集における熟語の浪

万葉集においては、二十三種類二四例の浪がある。そこで二表のように大きく四区分して考察する方法を試みたい。

まずこれ等の浪を部立別、捕えられ方別に見ると次の十表のようになる。



時間的浪		色彩的浪			動的浪						種類 捕部え立 役方及び 割・び				
小計	夕浪	小計	白浪	沖浪	青浪	小計	八百重浪	と重浪	千ゐ浪	し重浪		さざれ波	さざなみ	五百重浪	荒浪
1	1	29	21	7	1	5			1		3		1		雑歌
		8	7	1		10	1		2	1	3	1	2		相聞歌
		1	1			5			3		1			1	挽歌
		22	15	6	1	1	1								その他
1	1	60	44	14	2	21	1	1	3	3	2	6	1	3	計
1	1	15	14	1		6	1		1		1	1		1	協作用的浪
		15	12	3		13	1		3	1	5		3		譬喩的役割の浪
		10	5	4	1	1			1						嫌われる浪
		6	6			1			1						実景の浪
		9	7	2											好まれる浪
															強調的役割の浪
		3	3												使用者的役割の浪
		2	1	1											需らす浪
1	1	60	44	14	2	21	1	1	3	3	2	6	1	3	計

十一表  
さらに各部立に占める浪の割合を出すと次の十一表の如くなる。

挽歌 218	相聞歌 1697	雑歌 1432	詠歌数 種類	
			浪	動的浪
5	10	5	比率	0.35%
2.29%	0.59%	0.35%	浪	色彩的浪
1	8	29	比率	2.03%
0.46%	0.47%	2.03%	浪	時間的浪
		1	比率	0.07%
		0.07%	浪	場所的浪
2	11	22	比率	1.54%
0.92%	0.65%	1.54%	浪	

		場所的浪								
総計	小計	邊	邊	濱	門	白	河	沖	浦	池
		つ						つ		
57	22	1	2	1	6	8	1	1	2	
29	11	1	2		2	1	5			
8	2					1		1		
30	7	1	1			5				
124	42	2	5	1	1	2	7	19	1	2
36	14	1	3			9		1		
34	6	1			2	2	1			
24	13	1	1		4	6	1			
11	4				1			1	2	
9										
5	5	1	1			3				
3										
2										
124	42	2	5	1	1	2	7	19	1	2

では、十一表を参照しながら「動的浪」より順次検討してみよう。  
「動的浪」を部立面から見ると挽歌に占める割合が最も多いが、これは他の浪に比べ「動的浪」が最もはっきりと浪のもつ恐ろしさを表現しているからだと考えられる。なお「荒浪」、「とゐ浪」は挽歌だけに詠まれた浪であり、人の命をも奪う恐ろしい浪と考えられていたようである。また歌の中の浪を内容的に見ると「譬喩的役割の浪」が最も多い。これについては次のような理由があげられる。単なる「浪」では「譬喩的役割の浪」の多くは相聞歌に見られ

た。そして、そのほとんどのものが浪の動きを捕えて詠まれていた。だから「動的浪」に「譬喩的役割の浪」が多いのは当然といえよう。また、そのため「動的浪」の約五割が相聞歌に集中しているのである。譬喩的役割の「動的浪」は五種類あるが、それ等はいずれも「幾重にも寄せる（立つ）浪」または「しきりに寄せる浪」であり、このような性質を有する浪は譬喩的素材として非常に適していたといえよう。

「色彩的浪」を見ると、部立では雑歌が最も多く、内容的には「脇役的な浪」、「譬喩的役割の浪」が多い。「脇役的な浪」が多い理由としては「白」という色彩に対しての美意識が関係していると考えられる。

卷九1716白しら那な弥なみの乃の 濱はま松まつ之の木きの乃の 手たむけ酬くさ草さ 幾いく世よ左さ右みぎ二に箇か 年とし薄はへ経ねら経む濫む

この場合、松の緑と浪の白との色彩的な美しさが感じられる。このような白い浪に対する美意識は「好まれる浪」が九例あること、「使者的役割の浪」が三例あることも関係していると思われる。次の「時間的浪」は「夕浪」の一例であるが、これは玉藻に対し脇役的に詠まれている。

最後に「場所的浪」を見ると、部立面では雑歌に最も多く、内容的に見ると「脇役的な浪」、「嫌われる浪」が多い。ここで、雑歌が多いこと、「嫌われる浪」が多いこと、また「場所的浪」は場所を限定しているので実際に浪と直面している可能性が大きいことから旅の歌が多いのではないかと想像される。そこで「嫌われる浪」を調べてみるとそのほとんどが旅の歌であることがわかるのである。また「嫌われる浪」が多いことと関連して「強調的役割の浪」が多い。これは五例中四例が浪の恐ろしさが根底にあると思われる。

る。

卷二十41伊い弊へ都と乃の刀た东とう 可か比ひ曾そ比ひ里り弊へ流りゅう 波は麻ま奈な美み波は 伊い也や之し久く々く

二 多た可か久く与よ須す礼り騰と

この場合、浪がひどく立つのもかまわず家へのみやげのために貝を拾ったのであり、家族に対する愛情の深さを「濱浪」によって一層強調しているといえよう。

## 2、古今集、新古今集における熟語の浪

古今集、新古今集の熟語の浪で浪自体を称しているものは、三十九例あるが、これ等を内容的に分類すると次の十二表のようになる。

計	その他	場所的浪	時間的浪	色彩的浪	動的浪	浪の種類 捕え方・役割	
	浪 浪 の 枕 花	河 岩 浪 浪	夕 だ だ っ 浪	白 沖 つ 白 浪 浪	あ だ だ 浪		
6				3 2	1	譬喩的役割の浪	古 今 集
4		1		3		脇役的な浪	
						実景の浪	
						嫌われる浪	
						好まれる浪	
2	1			1		その他	新 古 今 集
12	1	1		6 3	1	計	
9	1	2 1		4 1		譬喩的役割の浪	
10	1		1	8		脇役的な浪	
6		1		4 1		実景の浪	
1				1		嫌われる浪	新 古 今 集
1				1		好まれる浪	
						その他	
27	1 1	3 1	1	18 2		計	

両集とも「譬喩的役割の浪」、「脇役的な浪」に集中しているが、  
 ここでの「譬喩的役割」の浪は万葉集の場合と違って浪の動きに

着目して譬喩的に詠まれたものはあまりない。また古今集では好悪  
 感が見られず、新古今集でもわずか一例ずつしか好悪感が見られな

いことは、万葉集と比べると浪を観念的に捕えているといえよう。なおこれは浪に接する機会が少なかつたためであろう。

## 結 論

本論をまとめると、浪の詠歌数から見ていくと、万葉集で最も多く古今集では大きく減少し、新古今集で再び増加している。また浪は六十六種類あるが、これ等は①「浪自体を称したもの」、②「浪と関係深い」、浪自体を示していないもの、③「浪と直接は関係のないもの」、④「枕詞として用いられたもの」に分類される。なお①に属するものが最も多く、特に単なる「浪」が三歌集通じて圧倒的に多い。①では、さらに「動的浪」、「色彩的浪」、「時間的浪」、「場所的浪」に分類される。「動的浪」は万葉集に集中しているが、これは万葉人が行動的で動的要素をもっていたからといえよう。また②③が新古今集に多いのは、新古今集が技巧的であったからであろう。

万葉集の単なる「浪」を調べると、雑歌では「嫌われる浪」が最も多いが、浪が船旅を妨害するため嫌われている。なお旅の歌が雑歌に占める割合は大きい。よって「嫌われる浪」が多いのである。相聞歌では「譬喩的役割の浪」が多いが、浪のさまざまな動きを捕え譬喩的に詠まれている。また挽歌では、すべて海の恐ろしさを表現するための脇役として用いられている。

浪自体を称している熟語の浪では「動的浪」から述べたい。ここでは浪の動きを譬喩的に表現したものが多く、「色彩的浪」では白に対する美意識が感じられる。また「場所的浪」では雑歌が多い

が、そのため「嫌われる浪」が多く見られる。

最後に古今集、新古今集を見ると「脇役的な浪」、「譬喩的役割の浪」に集中しており、浪に対する好悪感はほとんどない。また譬喩的表現の場合も浪の動きを捕えたものはあまりない。これ等から浪の捕え方について万葉集を動的捕え方とするならば、両集は観念的であり、静的捕え方とも言えるものと思う。

(注1) 「万葉集大成二十」美論篇(四三頁) —平凡社。

(注2) 「万葉集注釈・巻第八」(一五四頁〜一五六頁) 同書巻第廿(二九頁〜三〇頁)

(注3) 「万葉集講座・第六巻」編纂研究篇(九四頁・八〇頁・一一〇頁) —春陽堂

(注4) (注3)と同書(四五頁)

(注5) (注3)と同書(八八頁)

### 参考文献

万葉集・本文篇

古今和歌集

新古今和歌集

万葉集

万葉集注釈

古今和歌集評釈

新古今和歌集評釈

万葉集講座 第五卷・第六卷

万葉集大成20

瑞 書 房

日本古典文学大系

日本古典文学大系

日本古典文学大系

春 陽 社

平 凡 社